

〈論文〉

## ギッシングの『南イタリア周遊記』<sup>1</sup>

加藤 芳子

### (1) 序

ゲーテがイタリアで修業してドイツに帰った1788年から丁度100年たった1888年に、イタリアにむけて出発したイギリス人がいた。ジョージ・ロバート・ギッシング George Robert Gissing (1857-1903) という小説家である。

彼は、『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1903年) という随想録を残しているが、本論で取り上げたいのは、彼の紀行文『南イタリア周遊記』 *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy* (1901年) の方である。<sup>2</sup>

1857年に英国のヨークシャーで生れたギッシングは、少年の頃、エドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』(1776-88年) や古典文学を愛読して、古代文明の発生の地ギリシアやイタリアに憧れ、貧乏と不治の病に苦しみなながらも、三度もイタリアを旅する。それをまとめたのが、『南イタリア周遊記』である。100年前のドイツ人ゲーテが、イタリア人をかなり軽蔑的に見下しているのに対して、時代が違うとはいえ、丁度100年後に訪れた貧しいイギリス人ギッシングの、これまた貧しいイタリア人に対する見方は、時にはイタリア人に対する怒りや八つ当たりも見られるが、基本的には、とてつもなく暖かく優しい。まず、彼のイタリア旅行のルートを調べてみよう。

### (2) ギッシングのルート

ギッシングが初めてイタリアを訪れたのは、1888年のことである。9月26日にロンドンを発ち、パリにむかい、10月26日にパリ発の汽車で27日にマルセイユ着、船でマルセイユ発10月30日ナポリ着、ナポリでクリスマスを迎え、1889年元旦はローマで迎えている。ヴェネツィア、ミラーノを訪れてから、ブリュッセル経由で3月1日にロンドンに戻っている。この時の経験から、『解放』 *The Emancipated* (1890年) が生れている。

第2回目のイタリア旅行は、1889年11月11日から1890年2月27日にかけてのもので、この時はイタリアからギリシアにまで足を伸ばしている。

11月11日にマルセイユを出航してイタリア半島にそって南下し、メッシーナ海峡を通過してギリシアに渡り、戻ってきて12月19日にイタリア東部プリンディシに上陸、汽車でナーポリにたどり着く。ナーポリに滞在中、1890年1月末に、右肺が充血する病に倒れる。少し回復してから、2月20日にイタリアを出航し、地中海を西に向かい、ジブラルタル海峡を抜けビスケイ湾を横切り、2月27日ロンドン南のティルベリーに到着。帰国後、1897年2月に肺が悪化し、デヴォン州で療養するが、この頃カッシオドールスの本などを読みふけり、この時の旅の経験は、随想録『ヘンリー・ライクロフトの私記』の中にも登場する。

病をかかえながらも、ギッシングは三度目で最後のイタリア旅行に出かける。1897年9月22日ロンドンを発ち、イタリア中部のシエナに着くと、そこで『ディケンズ論』を執筆。11月にはローマに到着、ナーポリから、南イタリア周遊を開始する。11月16日火曜日正午ナーポリ港出航、海路南イタリアのパオラに11月17日水曜日上陸。パオラ発19日金曜日コセンツァ着。コセンツァ発タラント着。11月25日タラント発コトローネ着。11月28日コトローネ滞在中に発病し、医者にかかる。回復後12月6日月曜日コトローネ発カタンツァーロ着。12月10日金曜日カタンツァーロ発スクイラーチェ経由、夜レッジオ着、12月14日火曜日レッジオから汽車でモンテ・カシーノに取材に立寄り、ローマに滞在、H. G. ウェルズ夫妻に会う。コナン・ドイルとその義弟アーネスト・ホーナングと共に、ドイツのベルリンに向かい、旧友エドワード・ベルツに再会し、1898年4月についに英国に帰国。こうして、『南イタリア周遊記』が1901年に出版されることになる。

### (3) 『南イタリア周遊記』

貧しいイギリス人の旅人ギッシングにとっても、当時の南イタリアの貧しさは、時にはかなり耐えられないものであった。

翌朝いつものように起きたが、やっとの思いであった。コンコルディア旅館の食事のために、当然激しい消化不良に襲われたただけだ、と自分で自分に言い聞かせようとした。給仕が朝食を持って来てくれた時、怒りの目でそれを睨みつけた。この時ばかりは、食事時にお馴染となった例の小言幸兵衛氏と同じ心境になったのである。説明しておいた方がよいと思うが、朝食というのは、山羊のミルクの入ったひどいコーヒー

に、固い粗悪なパン、安ラードそっくりの味がする山羊のバターである。……牛のミルクはごく少量しかとれず、しかもいやな味がした。北欧方面でいう意味でのバターなど、ここでは存在しない。<sup>3</sup>

(85-86 頁)

In the morning I arose as usual, though with difficulty. I tried to persuade myself that I was merely suffering from a violent attack of dyspepsia, the natural result of *Concordia* diet. When the waiter brought my breakfast I regarded it with resentful eye, feeling for the moment very much like my grumbling acquaintance of the dinner hour. It may be as well to explain that the breakfast consisted of very bad coffee, with goat's milk, hard, coarse bread, and goat's butter, which tasted exactly like indifferent lard....Cow's milk could be obtained in very small quantities, but it was of evil flavour; butter, in the septentrional sense of the word, did not exist.

(65 頁)

南イタリアの食物のお粗末さに対して、ギッシングは時々皮肉をまじえて述べている時もある。

出された肉スープもひどいもので、色のついたお湯の上に脂が一インチほど浮いているだけ。一度鳥を上げましようと言われて、胸はずませて待ち構えたことがある。ところが、悲しいかな！ 出された哀れな鳥はスープを取るためにさんざん煮られた後だった。この出しがらと、古いキッドの手袋二つ三つを丸めて煮たのの区別ができる人がいたらお目にかかりたいものだ。

(102 頁)

The broth offered me was infamous, mere coloured water beneath half an inch of floating grease. Once there was a promise of a fowl, and I looked forward to it eagerly; but, alas! this miserable bird had undergone a process of seething for the extraction of soup. I would have defied anyone to distinguish between the substance remaining and two or three old kid gloves boiled into a lump.

(78 頁)

次に出たのは私が注文した料理——短時間で出せる唯一の料理だが——で、豚肉とポテトのシチューである。豚肉（マジヤーレ）はこのあたりの主要食料で、ホメーロス

時代の人物が食べた肉と思って、よく私はこの肉をまあまあ好んで食べた方であったが、スクイラーチェの豚肉には降参した。ひどい臭いがして、靴革のように固い。

(149頁)

Next appeared a dish for which I had covenanted — the only food, indeed, which the people had been able to offer at short notice — a stew of pork and potatoes. Pork (*maiale*) is the staple meat of all this region; viewing it as Homeric diet, I had often batted upon such flesh with moderate satisfaction. But the pork of Squillace defeated me; it smelt abominably, and it was tough as leather.

(117頁)

ただし、野菜のピーマンであるペペローニを「果物」と誤解していたり、ワインを水でうすめて飲むという古来からの伝統を知らずに、「どうやらどっさり水まししてあるらしい」と誤解していたりで、異なった文化をギッシングがただ理解できなかつただけという部分があることも否めない。

次の一節で彼は、当地の女性に清潔感がないこと、つまり恐ろしい程野蛮であることを述べている。

おかみは肉を切る手伝いをしてくれた。……それからいかにも満足げに手をスカートでふく。過去十二カ月というもの、彼女の手が水に（石鹼は言うまでもない）触れたことがあったら、おなぐさみだ。

(102頁)

...the good woman offered her aid in the carving; she took hold of the bird by the two legs, rent it asunder, tore off the wings in the same way, and then, with a smile of satisfaction, wiped her hands upon her skirt. If her hands had known water (to say nothing of soap) during the past twelve months I am much mistaken.

(78頁)

人間はおろか、動物さえも悲惨な状況にある。

動物たちも注目に値する。どちらへ行っても瘦せた豚に<sup>や</sup>出会う。ブウブウ鳴きながら、跳びはね、ばたばた踊り回り、まるで悪天候に大喜びといった様子。骨と皮ばかりの犬が元気なく<sup>えさ</sup>餌を探して歩き回り、私が近づくとみな逃げて行く。

(152 頁)

The animal population was not without its importance. Turn where I would I encountered lean, black pigs, snorting, frisking, scampering, and squealing as if the bad weather were a delight to them. Gaunt, low-spirited dogs prowled about in search of food, and always ran away at my approach.

(120 頁)

しかし、南イタリアの美しさは、ギッシングの心を深く捕えている。

私がマリーナ駅に降り立った時は、太陽が沈みかかっていた。支線の列車を待っている間、素晴らしい空の色を眺めているうちに、私は病気の苦しきなど忘れてしまった。

周囲にはこれまで見たことのないほど素敵なオレンジ林があり、熟れかかった実をたわわに抱く暗い茂みの上から、西空の輝かしい光が降り注いでいる。この風景の色調の豊かさを、どんな絵画にもひけをとらない。深い温かい緑の生い茂った葉は照り映え輝き、その壮大なおもむきが、周囲の飾りとなっている無数の黄金色の輝く背景によって、一層ひき立てられている。その彼方では、魔法の海が広がり、太陽がまばゆくて見えない水平線に落ちるにつれて、一面に紫と乳に染まった。西の方、シラSilaの山々の斜面の上には、満月に近い月がかかり、バラ色に柔らかく変った空に、黄色い秋の落葉がはりついたかのよう。

私の頭の中の地理書には、ヘスペリデスの庭園は、カタンツァーロと海の間にある、と書かれているのだ。

(118-119 頁)

The sun was setting when I alighted at the Marina, and as I waited for the branch train my eyes feasted upon a glory of colour which made me forget aching weariness. All around lay orchards of orange trees, the finest I had ever seen, and over their solid masses of dark foliage, thick hung with ripening fruit, poured the splendour of the western sky. It was a picture unsurpassable in richness of tone; the dense leafage of deepest, warmest green glowed and flashed, its magnificence heightened by the blaze of the countless golden spheres adorning it. Beyond, the magic sea, purple and crimson as the sun descended upon the vanishing horizon. Eastward, above the slopes of Sila, stood a moon almost at its full, the yellow of an autumn leaf, on a sky soft-flushed with rose.

In my geography it is written that between Catanzaro and the sea lie the gardens of the Hesperides.

(92 頁)

しかも、ギッシングが南イタリアの景色を見ている時、彼はいつも、そのむこうに、古代の栄華盛衰を見てとっている。

大荒れの夜となった。やっと雨が止んだと思ったら、アスプロモンテの暗黒の山のあたりで、絶え間なく稲妻が光る。後に月が上って、明るく照らされた雲の間を動くにつれて、海岸に白波が砕けるのが見えた。列車が止る度ごとに海の音楽が聞こえて来る——ある時はホメロスの詩句を、ある時はテオクリトスの詩句をこだまさせているかのよう。この遠い南国の海岸を昼間通ったら、何を思い浮かべるかは知らないが、夜になると古代「ギリシャの詩人たち」の霊でみちみちている。

(174-175 頁)

It was a wild night. When the rain at length ceased, lightning flashed ceaselessly about the dark heights of Aspromonte; later, the moon rose, and sailing amid grandly illumined clouds, showed white waves rolling in upon the beach. Whenever the train stopped, that sea-music was in my ears——now seeming to echo a verse of Homer, now the softer rhythm of Theocritus. Think of what one may in day-time on this far southern shore, its nights are sacred to the poets of Hellas.

(138 頁)

しかし、ギッシングがこの『南イタリア周遊記』の中に残したかったことは、南イタリアの景色の美しさではない——それだけではない。彼が一番興味を持って観察していたのは、南イタリアの人間の生きざまであった。

次の一節は、カタンツァーロでショールなどを売っていた女に関する印象を語っている部分である。人生を苦しみ抜いたギッシングならではの共感と彼の理想がにじみ出ている。

商談が成立すればいいと願ったが、結局不成功だった。ところが、それなのに彼女の態度たるや、誰にも出来そうにないほど堂々としている。商品を見せる時のやり方たるや、まるで優雅に恩恵を施してやっているかのよう。断られる度ごとに彼女は見たところ少しも騒がず、平然たる様子で悠々と去って行く。いつまでも諦めず<sup>あきら</sup>にいると

ころから、いかに金を欲しがっているかがわかるが、顔つきや口調には全然売りがついている様子はない。あの背の高い、きつい顔立ちの女が、しっかりとした足どりで、気品のある身のこなしで、カタンツァーロの通りを歩き回っていた姿は、いつまでも忘れられない。彼女を憐れむ、などと言ったら失礼に当るだろう。彼女の労苦にみちた生活の一端を私は垣間みたわけであるが、それはどこか尊敬に値するものであった。失意落胆の苦い味をこれほどまでに黙々と、雄々しく耐えている人間の姿を、私は見たことがなかった。

(131 頁)

I watched her for a long time, hoping she might make a sale, but ever she was unsuccessful; for all that she bore herself with a dignity not easily surpassed. Each offer of her wares was made as if she conferred a graceful favour, and after each rejection she withdrew unabashed, outwardly unperturbed, seeming to take stately leave. Only her persistence showed how anxious she was to earn money; neither on her features nor in her voice appeared the least sign of peddling solicitude. I shall always remember that tall, hard-visaged woman, as she passed with firm step and nobly balanced figure about the streets of Catanzaro. To pity her would have been an insult. The glimpse I caught of her laborious life revealed to me something worthy of admiration; never had I seen a harassing form of discouragement so silently and strongly borne.

(101-102 頁)

サン・ソステーネの小村から車で通学する学生デ・ルカ・フェデレが車中で読書をしていて、ギッシングと目が合った時に見せた「素直そうな微笑」と「利発で元気」などころは、「イタリア人のいちばんいい所を備えている」として、ギッシングの心に残っている(173-174 頁)。

コトローネで彼は、手回しオルガンの伴奏で歌う声を耳にすると、それが「民族の気質を実によくあらわし、民族の歴史を如実に語っている」ことに思いをはせる。

このメロディーが初めて私の耳に入って来た時は、私はコトローネとその住民に悪意を抱いていたが、音楽が止むやいなや、私は自分の偏狭と恩知らずを強く責めた。イタリアの空の下でイタリア人の音楽が鳴り響く途端に、この民族の欠点などすべて許す気持に襲われてしまう。イタリア人がどれほどの苦しみをなめ、さんざん痛めつ

けられながらも、どれほどの成果を残したかを、思い出してみるとよい。この美しい栄光の土地の上に、野獣のような民族が次から次へと襲いかかり、幾世紀にもわたる征服と隷属とが、イタリア人に与えられた運命だった。どこの土地でもそこは血に浸されたことがあるのだ。イタリア人の陽気なメロディーの中から、記憶の及ばぬ昔からの悲しみが聞えて来る。昔のさまざまなものをふり返れば、無念と疲弊にみちみちた国なのだ。最近はとるに足らぬ国となり、将来の希望も本気では持つことができぬ国なのだ。クロトンの遺跡の上に響きわたるこの歌声を聞いていると、私は感動のあまり自分の愚かな苛立ち、自分の傲慢なあら探しを詫びる気持になった。ここにやって来たのは、この土地の人びとを愛したからではなかったか。そして私の愛情は、これまで充分のお返しを受けて来たではないか。

(107頁)

At the moment when this strain broke upon my ear, I was thinking ill of Cotrone and its inhabitants; in the first pause of the music I reproached myself bitterly for narrowness and ingratitude. All the faults of the Italian people are whelmed in forgiveness as soon as their music sounds under the Italian sky. One remembers all they have suffered, all they have achieved in spite of wrong. Brute races have flung themselves, one after another, upon this sweet and glorious land; conquest and slavery, from age to age, have been the people's lot. Tread where one will, the soil has been drenched with blood. An immemorial woe sounds even through the lilting notes of Italian gaiety. It is a country wearied and regretful, looking ever backward to the things of old; trivial in its latter life, and unable to hope sincerely for the future. Moved by these voices singing over the dust of Croton, I asked pardon for all my foolish irritation, my impertinent fault-finding. Why had I come hither, if it was not that I loved land and people? And had I not richly known the recompense of my love?

(82頁)

ゲーテが、落ちぶれたイタリアの人々をかなり見下して見ていたのに比べ、<sup>4</sup> 次の一節からは、キッシングの、時間を超越したイタリア賛歌が聞こえてくる。

イタリアの土から生れた素朴な人びとの間を漫歩する外国人が、自分の国の優越を誇り、苛立って相手を軽蔑するのは僭越せんえつというものだ。これこそ旅行者の悪趣味である。

牛の後について畑を耕しながら、オリーブの枝をゆすって実を取りながら口ずさむカラブリア農民の歌に耳を澄ましてみるがよい。古代さながらの静けさの中に響く悲しげな声、報われることの少ない労働の慰めとなる長い嘆き節は、イタリアそのものの心の奥底から湧き上がり、人類の記憶を呼び起こしてくれるのだ。

(108 頁)

But among the simple on Italian soil a wandering stranger has no right to nurse national superiorities, to indulge a contemptuous impatience. It is the touch of tourist vulgarity. Listen to a Calabrian peasant singing as he follows his oxen along the furrow, or as he shakes the branches of his olive tree. That wailing voice amid the ancient silence, that long lament solacing ill-rewarded toil, comes from the heart of Italy herself, and wakes the memory of mankind.

(82-83 頁)

タラントの海でギッシングは、土着民の漁夫や農夫が太古の昔さながらに労働している姿に深い感銘を受けて、プラトンの時代や、ハンニバル、サラセン人等の時代に思いをはせている。

下の岩では漁夫が大きな網を引いている。子供が水の中へぴちゃぴちゃ入って、魚が間違ひなく最後まで網の中へ入るよう追い込んでいる。彼らの体格は実に見事だ。美と力が極まり、裸の腕や脚はテラコッタ焼の色をしている。……漁夫のゆっくりした、忍耐強い仕事ぶりは、記憶も及ばない昔からの習慣を物語っていて、時間の流れそのものとマッチしている。……彼らのしなやかな四肢、働いている時や憩<sup>いこ</sup>っている時の姿勢、さんばらの黒い髪などを見ていると、古代の壺に描かれた人の姿をいつも思い出す。……その日ももっと遅くなってから、これと同じように感銘深い人に出会った。新市街の彼方<sup>かなた</sup>、広くてあまり人が住んでいない街路が終るあたりに、オレンジの林と苗床があつて、農夫がたった一人荒野を耕していた。木の鋤<sup>すき</sup>は、形だけを見ると何千年も昔のもののように見える。小さな驢馬<sup>ろば</sup>がそれを引いて、地面——実り豊かな南国の土——をひっかいて畝を作っている。……これほど辛抱強く、原始さながらの悠々たる仕事ぶりを見たことがない。驢馬の耕し方というのは、一分間引いてから二分間休むというものだったが、農夫は全然驚きもしないし、腹も立てない。手に長い棒を持ってはいるが、絶対にそれは使わなかった。驢馬が立止る度ごとに彼はじっと見やり、いかにもやさしげに、「ア—ア—ア—」と長く伸ばしたお小言を真面目な調子

で言う。人と獣ではなく、働く仲間同士であって、見るからに心が<sup>なご</sup>和んだ。

(40-42 頁)

On the rocks below stood fishermen hauling in a great net, whilst a boy splashed the water to drive the fish back until they were safely enveloped in the last meshes; admirable figures, consummate in graceful strength, their bare legs and arms the tone of terra cotta....Their slow, patient effort speaks of immemorial usage, and it is in harmony with time itself...their lithe limbs, their attitudes at work or in repose, their wild, black hair, perpetually reminded me of shapes pictured on a classic vase....Later in the day I came upon a figure scarcely less impressive. Beyond the new quarter of the town, on the ragged edge of its wide, half-peopled streets, lies a tract of olive orchards and of seed-land; there, alone amid great bare fields, a countryman was ploughing. The wooden plough, as regards its form, might have been thousands of years old; it was drawn by a little donkey, and traced in the soil — the generous southern soil — the merest scratch of a furrow....Never have I seen man so utterly patient, so primævally deliberate. The donkey's method of ploughing was to pull for one minute, and then rest for two; it excited in the ploughman not the least surprise or resentment. Though he held a long stick in his hand, he never made use of it; at each stoppage he contemplated the ass, and then gave utterance to a long "Ah-h-h!" in a note of the most affectionate remonstrance. They were not driver and beast, but comrades in labour. It reposed the mind to look upon them.

(27-28 頁)

タラントの土着民の「原始さながらの」「自然の生活」, 「忍耐強い仕事ぶり」などに対する, ギッシングの「深い尊敬の念」は, ゲーテの視点とは全く異なり, むしろ, 後の D. H. ローレンスに近いものを想起させる。ローレンスは, イタリアに関しては, 『イタリアの薄明』 *Twilight in Italy* や, 『エトルリアの故地』 *Etruscan Places*, そして 『サルデーニアの海』 *The Sardenian Sea* などの紀行文・エッセイを書いているが, これに関しては, 別の機会に論じようと思う。

#### 註

- 1 この論文は, 日本英文学会北海道支部主催第 39 回英米文学講座(於 北海道大学文学部)に於ける講

ギッシングの『南イタリア周遊記』

演、「イタリアに魅せられた作家達」の一部に、加筆修正を施したものである。

- 2 G. Gissing: *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy* (Illinois: Northwestern, 1996).  
原文の引用は全てこれによる。
- 3 G. ギッシング著, 小池 滋訳『南イタリア周遊記』(岩波文庫, 1994). 邦訳の引用は全てこれによる。
- 4 拙論「ゲーテの『イタリア紀行』」『札幌大学総合論叢』, 第7号, 101-111頁を参照。